

新型コロナウイルス感染対策に伴う「信仰的指針」

—教会・伝道所に連なる皆様へ—

大会執事活動委員会
西 牧夫

「あなたがたは、わたしが種々の試練に遭ったとき、
絶えずわたしと一緒に踏みとどまってくれた」(ルカ 22:28)

はじめに

次主日(4月5日)から受難週に入ります。3月6日(金)に、当委員会から「**新型コロナウイルス感染症に伴う注意喚起(三)**」を送らせて頂きました。これは、各個教会・伝道所が、それぞれの現場において、現状を冷静に捉え、信仰的理性による熟慮と判断をもって対策の道筋を立てるための、具体的な判断材料を提供することを目的としました。

一人ひとりの自覚的な行動指針

今、新型コロナウイルスの急激な感染拡大に伴って、全世界が直面している共通の根本的な課題は、「いのちを守る」ということです。社会全体が、医学的、政治的、経済的、社会的、文化的な面から理性的に熟慮し、深い人間的な思いやりをもって、一人ひとりの「いのちを守る」ための自覚的な行動を取らなければなりません。現在、このウイルスに対する治療法もワクチンもまだありません。そのような深刻な状況下で、罹患者ができる限りベストな条件で治療を受けられ、研究者が薬とワクチンを開発する時間を稼ぐために、さらなる感染を予防し、拡大のスピードをできる限り抑えることが、今求められています。

そこで、私たち一人ひとりに行動指針として求められているのは、感染の危険を可能な限り抑えるために、互いの直接的な「**接触を控える**」こと、物理的な「**距離を取る**」ことです。そのことが、今のこの時期、他者を思いやり、互いの「いのちを守る」ことになります。しかも、そのところで、人を孤立させるのではなく、互いを結び合わせる新しい交わりの在り方を生み出していかなければなりません。

日本キリスト改革派教会の状況

日本においても、都市部での感染急増に伴い、3月26日(木)、「新型コロナ特別措置法」に基づく「政府対策本部」が設置され、首都圏や大阪府では知事からの「外出自粛」要請が出されました。今後、急激な感染拡大のために、「緊急事態宣言」が発動され、自治体から「外出自粛」だけでなく、「都市封鎖」や、人の集まる「諸集会中止」の要請や命令が出される可能性もでてきました。

そのような状況の中で、多くの教会・伝道所は、礼拝以外の諸集会を休会とし、教会活動を「礼拝」のみに限定する措置を取っています。さらに、3月29日(日)から、「集団感染」を予防するために、直接礼拝堂に集まることを控え、インターネット配信による礼拝や、週報や説教原稿を配布して家庭礼拝に切り替えた教会・伝道所もあります。このことは、当たり前前に共に献げてきた礼拝とその交わりの恵みが、いかに大きなものであるかを受け取り直す機会ともなるでしょう。

「礼拝共同体」である教会の使命

今後のさらなる困難が予想される中で、教会は、何より「**教会のいのち**」である礼拝が

具体的に問われます。たとえ、共に集まって礼拝を献げることができなくなっても、「礼拝共同体」である教会は、様々な手段を用いながら、「神を礼拝し、神の言葉に聴き、神に祈る」霊的な営みを止めません。「礼拝と祈り」の中で聴き続ける「神の言葉」によって、根源から示される希望の道筋を証しすることが、教会の使命であり、地域社会に対する最も大きな奉仕です。「試練」の時こそ、今一度、立ち止まる必要があります。

今回の「信仰的指針」の目的は、この「試練」を、どのように受けとめ、乗り越えてゆけばよいのか、教会の「霊的戦い」の姿勢を整える際の一助として頂くことにあります。

「霊的戦い」としての『荒れ野の誘惑』

この先行きの見えない非常事態の中で、私たちの社会は、利己主義的な買い占め、権力の濫用の危険、不信や不安を煽る情報等に振り回され、いまだ対策の全体像とその道筋が見えていません。

ルカ福音書の『荒れ野の誘惑』は、「試練」の中で、「神の子」イエスが父なる神との愛の交わりのうちにどのように踏みとどまり続けたのか、その「霊的戦い」を最もよく知ることのできる場面の一つです。「聖霊に導かれて」、私たちも、襲い来る「試練」に対して、どのように判断し行動するかを考える前に、その土台として、まず「私たち自身が絶えずイエスと共に「神の愛」にどのように踏みとどまれるのか」(ルカ 22:28)を示されたいと願います。

『荒れ野の誘惑』(ルカ 4:1~13)

1. 「生存」に関わる誘惑

第一の誘惑

第一の誘惑の場面では、「四十日間、何も食わず」飢えに苦しむイエスに、悪魔は次のように誘惑します。「神の子なら、この石にパンになるように命じたらどうだ」(4:3)。

しかし、イエスは、この誘惑を、申命記 8章 3節の「神の言葉」によって、次のように斥けます。「『人はパンだけで生きるものではない』と書いてある」(4:4)。

ここで引用された申命記 8章には、こうあります。〈神がイスラエルの民を荒れ野の四十年に亘る旅に出し、彼らに「飢え」を体験させて「試みた」のは、民の心を探り、神の命令を守るかどうかを知るためであった。しかしそれだけではない。「人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きること」を知らせ、天からマナを降らせて民を養った「神の愛」を体によって知らせるためであった〉(申命記 8:2~5)。

「生存」に関わる誘惑の本質

「生存」に関わる誘惑の本質とは何でしょうか。それは、目の前の切実な現実と比べると、「神」の存在は現実離れした、非現実なものであると見せかけ、私たちを「神」から引き離すことにあります。しかし、「いのちの源なる神」を離れ、単に人間的な価値観だけによっては、いくら沢山の食料があっても、共に分かち合い、それぞれが満たされることはありません。なぜなら、そこに人間の罪があるからです。

「人はパンだけで生きるものではない」

イエスは、この誘惑を、「『人はパンだけで生きるものではない』と書いてある」と斥けます。ここで、「飢え」という生存に関わる切実な「苦しみ」を自ら引き受けながらも、この重い現実を、まず「神の言葉」の光の中で受け取り直すのです。

イエスがこの「神の言葉」によって明らかにするのは、人間は、根本的に、神から命を与えられ、神によって生かされている存在だということです。人は、先ず「いのちの源な

る神」を求め、「神の言葉」に聴き従い、「神の愛」を経験するところで初めて、真の人として「愛に生きる者」とされます。「神の愛」を常に受け取り直すことによってこそ、生存に関わる「苦しみ」の中であって、他者とパンを分かち合い、共に生きる者とされるのです。ここから、目の前の現実から迫ってくるあらゆる問いが、活ける神との正しい関係の中で置き直され、正しく対処する道筋が開かれてゆきます。

2. 「権力と繁栄」に関わる誘惑

第二の誘惑

第二の誘惑の場面では、「悪魔はイエスを高く引き上げ、一瞬のうちに世界のすべての国々を見せ」、次のように誘惑します。「この国々の一切の権力と繁栄とを与えよう。それはわたしに任されていて、これと思う人に与えることができるからだ。だから、もしわたしを拝むなら、みんなあなたのものになる。」(4:6～7)。

しかし、イエスは、この誘惑を、申命記 6 章 13 節の「神の言葉」によって、次のようにはっきりと斥けます。『あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ』と書いてある」(4:8)。

ここで引用された申命記 6 章は、モーセが、約束の地に入るイスラエルの民に、約束の地カナンで守るべき主の戒めと掟を語る箇所です。それは、「聞け、イスラエルよ（「シエマー・イスラエル」）。我らの神、主は唯一の主である。あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」（申命記 6:4～5）という有名な言葉で始まります。続いて、この教えを子供達に教えよと命じた後、約束の地カナンでの豊かな生活を与えられても、「他の神々」の後に従ってはならないと警告し、エジプトの奴隷の家から導き出した主を決して忘れず、「あなたの神、主を畏れ、主にのみ仕え、その御名によって誓いなさい」と命じます（申命記 6:10～15）。

「権力と繁栄」に関わる誘惑の本質

ここで悪魔は、ただ単に「世界を支配するための権力と繁栄」について誘惑しているわけではありません。そうではなく、「神の子」であるイエスが、この世界を支配し、「救い主」メシアとしての使命をどのように果たすことができるのか。その道筋と方法を、真の支配者なる神からではなく、「神ならざるものを拝む」ことによって手に入れるように誘惑するのです。

実際に、〈地上的な権力〉によって、〈信仰による救い〉を実現しようとする誘惑が、歴史を通じて起こり続けてきました。しかし、最終的には常に、「ただ主をのみ拝み、ただ主にのみ仕える」べきはずの教会の信仰が、その地上的な権力に仕え、利用されるという悲劇が、繰り返されて来たのです。

「あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ」

しかし、イエスは、この誘惑を、『あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ』と書いてある」と斥けます。いつの時代でも、人々は、自分たちの思い描く英雄的な力に満ちたメシアが、危機を収束させ、直ちに理想的な国を立ち上げて繁栄をもたらしてくれることを願います。しかし、イエスが真のメシアとしてもたらしたのは、そのような人間の思い描く理想的な世界像ではありません。そうではなく、選びの民イスラエルを導いて来た「活ける主なる神」による真の支配を、この世界にもたらしたのです。

「神の栄光」は、人間の目には無力で悲惨と見えるへりくだりの道を「ただ主にのみ仕えて」歩む「苦難の僕」の十字架の死と復活において、はっきりと現されました。それは、地上的な権力と繁栄に囚われて、「神ならざるもの」を拝む私たち罪人を解放し、「ただ主にのみ仕える」自由の中で、すべての「支配と力と栄光」を神に帰して、とこしえに主と共におらせるためです。

3. 「主を試みる」誘惑

第三の誘惑

第三の誘惑の場面では、「悪魔はイエスをエルサレムに連れて行き、神殿の屋根の端に立たせて」、次のように誘惑します。「神の子なら、ここから飛び降りたらどうだ。というのは、こう書いてあるからだ。『神はあなたのために天使たちに命じて、あなたをしっかりと守らせる。』また、『あなたの足が石に打ち当たることのないように、天使たちは手であなたを支える』」（4:9～11）。

しかし、イエスは、この誘惑を、申命記 6 章 16 節の「神の言葉」によって、次のように斥けます。『あなたの神である主を試してはならない』と言われて」（4:12）。ここで引用された申命記 6 章 16 節には、こうあります。「あなたたちがマサにいたときにしたように、あなたたちの神、主を試してはならない」（申命記 6:16）。この出来事は、荒れ野を旅するイスラエルの民が「マサ」という場所で、激しい渇きによる死に直面して、飲み水を求めて指導者モーセと争い、さらにモーセを召した神を疑い、「果たして、主は我々の間におられるのかどうか」と言って、「主を試した」出来事です（出エジプト 17:1～7）。

「主を試みる」誘惑の本質

この最後の誘惑で注目すべきことは、「神の言葉」によって斥けられてきた悪魔自身が、今度は、神への全き信頼を述べる詩編 91 編を巧妙に引用して、「神の言葉」に聴く根本的な姿勢を試していることです。この試みの中心にあるのは、〈神とは私にとってどういう方であるのか〉という問題です。

「神を試すこと」。それは、自分の秤に従って神を計り、自分の基準に合わなければ神とは認めないとする、思い上がった在り方です。そのように、「神の言葉」に自ら聴き従おうとすることなく、神の上に立つ者は、主なる神を低めるだけでなく、他者を見下し、ひいては自分自身を低めることにもなるのです。

イエスがこの引用によって明らかにするのは、「神を試みる」ことによってではなく、神に全き信頼を置くことによってこそ、詩編 91 編に約束された真の「神の守り」が確信できるということです。

「あなたの神である主を試してはならない」

イエスは、どこまでも「神を試みる」ことを斥け、人間を罪から救い出そうとする神の愛の御心に従って、十字架の死に至るまでその闇の深淵に降っていきます。ここに、詩篇 91 編の究極的な信頼が、どういうものであるかが明らかにされます。活ける真の神に依り頼み、神を呼び求める者は、人生の中で襲いかかる「暗黒の中を行く疫病や真昼に襲う病魔」

（詩編 91:6）のあらゆる不安や恐れの中にあっても、「神の言葉」の真実のゆえに、「神の御手の中にある守り」を決して失うことがないことを知っているのです（詩編 91:14～16）。彼は、すべてのことにおいて、救いの益となるように、自分を守る「神の愛」があることを、確かに知っているのです。

そのような「神の愛」への全き信頼と確信のうちに、イエスは、御心に従って十字架の死の深みにへりくだって行き、神によって復活の主として高く挙げられました。「こうして、天上のもの、地上のもの、地下のものがすべて、イエスの御名にひざまずき、すべての舌が、「イエス・キリストは主である」と公に宣べて、父である神をたたえるのです」（フィリピ 2:10～11）。ここに、「教会のいのち」である礼拝の姿があります。

「キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように」

（二コリント 13:13）